



魯 迅
茅 盾

呐喊 彷徨 朝花夕拾
故事新編 野草 評論

霜葉は二月の花よりも紅く
脱險雜記

竹内好・奥野信太郎・小川環樹訳

世界文學大系

62

筑摩書房版

世界文学大系 62

魯 迅
茅 盾

昭和33年7月10日発行

定価 450 円

訳 者 竹 奥 野 内 好
小 川 信 太 郎
環 樹
発行者 古 田 晁
印刷者 山 元 正 宜
発行所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768 電話(29)局7651

目次

魯迅

竹内好訳

呐喊

5

自序 狂人日記 孔乙己 藥 小さな出来事 風波 故郷

阿Q正伝 あひるの喜劇 宮芝居

彷徨

64

祝福 酒樓にて 石鹼 孤独者 傷逝 離婚

朝花夕拾

116

藤野先生

故事新編

120

序言 補天 奔月 理水 鑄劍 出閔 非攻

野草

163

評論

185

ノラは家出してからどうなったか 雷峰塔の倒壊について ふ
たたび雷峰塔の倒壊について 「フェアプレイ」は早すぎる
花なきバラ 花なきバラの二 「墓」の後に記す 左翼作家連盟

についての意見 上海文芸の一瞥 忘却のための記念 深夜に
記す 徐懋庸に答え、あわせて抗日統一戦線の問題について 死
日本語で書いた文章

237

茅 盾
火・王道・監獄 現代支那に於ける孔子様 私は人をだましたい

霜葉は二月の花よりも紅く

奥野信太郎訳

247

脱 險 雑 記

小川環樹訳

380

魯 迅 論

茅 盾
松井博光訳

431

吳奔星の茅盾論

奥野信太郎

440

解 説 魯 迅

竹 内 好

444

茅 盾

奥野信太郎

450

年 譜

453

装 幀 庫 田 發

魯

迅

自序

私も若いころは、たくさん夢を見たものである。のちにはあらかた忘れてしまったが、自分では惜しいとは思わない。思い出というものは、人を楽しませるものではない。思ひ出といふものは、寂し(さび)がらせないでもない。精神の糸に、過ぎ去った寂寞(さび)の時をつながせておいたとて、なんにならう。私としてはむしろ、それが完全に忘れられないのが苦しいのである。その忘れられない一部分が、いまとなって『呐喊』となった、というわけである。

私は、かつて四年あまりのあいだ、しょっちゅう——ほとんど毎日、質屋と薬屋に通った。年齢は忘れてしまったが、とにかく薬屋の帳場が私の背丈(せ)ほどあり、質屋のそれは背丈の倍ほどあった。私は、背丈の倍ほどある帳場の外から、着物や髪かざりなどをさしだし、さげすみの中で金を受け取り、それから背丈ほどの帳場

へ行つて、長わすらいの父のために薬を買つた。家に帰れば帰るで、また仕事(しごと)が山ほどあった。かかりつけの医者がごく有名な人だったので、その処方(せう)の薬引(薬補助)も変わつていたからである。冬の蘆(あし)の根、三年霜にあつた甘蔗(かんさ)、元のつがいのままのコオロギ、実のなつた平地木(小一木)……手に入りがたい代物ばかりである。それほどにしては父は、病(やま)が日まじに重くなり、とうとう死んでしまった。

かなりの暮らした向きから、急にどん底生活に陥つた人があるとすれば、その人はきつとその過程で世間の人びとのいつわらぬ姿を見るだろうと私は思う。私がNへ行つてK学堂にはいろいろと決心したのも、異なる道を行き、異なる土地へのがれて、別種の人びとと交わりたいと考えたかららしい。母は、しょうことなしに、八

円の旅費(りょひ)を工面(こうめん)してくれて、私の好きなようにせよと言つた。だが母は、泣いた。これは人情として、当然であつた。なぜなら、そのころは経書(けいしょ)を学んで官吏の試験(しけん)を受けるのが、正當なコースであり、洋学(ぎやうがく)を勉強(べんきやう)するのは、世間の眼からすると、行き場所(ゆきばしょ)のなくなった人間(にんげん)がついに魂(たま)を毛唐(けいとう)に売り渡したものと見られていて、それだけよけいにはずかしめられ、いやしめられるからであり、のみならず、母は、自分の息子に会えなくなるからであつた。だが私は、そんなことにかまつていられずに、とうとうNへ行つてK学堂(がくどう)に入學(にがく)した。この学校(がく)で私ははじめて、世には物理(ぶつり)や、数学(すうがく)や、地理(ちり)や、歴史(れき)や、

図画(ずゐ)や、体操(たいそう)などの学問(がくもん)があることを知つた。生理学(せいりよく)は習(な)わなかつたが、私(わたし)たちは木版本(ぼくばんぼん)の『全体新論(ぜんたいしんろん)』や『化学衛生論(がくがくせいしんろん)』などを目にするこができた。私はいまでも覚えてゐる。以前の医者の理屈(りくつ)や処方(せう)を、いま知つたこととくらべてみて、しだいに私は、漢(わん)医(い)はけつぎよく意識(いしき)のあるいは無意識(むいしき)的な騙(た)りにすぎない、ということをさとするようになったのである。そして同時に、騙(た)られた病人(びやうじん)と、その家族(かぞ)にたいして深い同情(どうじやう)をいだくようになった。さらにまた、翻訳(ほんやく)された歴史(れき)書(しょ)によつて、日本の維新(いしん)が大(お)半(はん)、西洋(せいやう)医学(いがく)に端(は)を發(は)しているという事實(じじつ)をも知るようになったのである。

これらの幼稚(ちゆうい)な知識(ちしき)のおかげで、のちに私の学籍(がくせき)は、日本(にっぽん)のある田舎(いんか)町の医学專門(いがくせんもん)学校(がく)に置かれることになつた。私の夢(ゆめ)はゆたかであつた。卒業(そつぎやく)して國(くに)に帰(かへ)つたら、私の父(ちち)のように誤(あや)まされてゐる病人(びやうじん)の苦(くる)しみを救(すく)つてやろう。戦争(せんそう)のときは軍医(ぐんい)を志願(しげん)しよう。そしてかたわら、國民(こくみん)の維新(いしん)への信仰(しやうぎやう)を促進(そくしん)させよう。そう私は考(かん)えていた。私は、微生物(せいぶつ)学(がく)を教(お)える方法(はうほう)がいまどんなに進歩(しんぷ)したか、知るべくもないが、ともかくそのころは、幻燈(げんとう)をつかつて、微生物(せいぶつ)の形態(けいぎ)を映(うつ)してみせた。そこで、講義(かうぎ)がひとくぎりしてまだ時間(じかん)にならないときなどには、教師(がうし)は風景(ふうけい)やニュースの画片(がくぺん)を映(うつ)して学生(がくせい)に見(み)せ、それで余(あま)つた時間(じかん)をうめることもあつた。時(とき)あたかも日露(にっろ)戦争(せんそう)の際(きわ)なので、当然(たうぜん)、戦争(せんそう)に関する画片(がくぺん)が比較(ひかく)的多(た)かつた。私はこの教室(がうしつ)の中で、い

つも同級生たちの拍手と喝采かくさいとに調子を合わせなければならなかった。あるとき、私はとつぜん画面の中で、多くの中国人と絶えて久しい面会をした。一人が真中にしばられており、そのまわりにおおせい立っている。どれも屈強な体格だが、表情は薄ぼんやりしている。説明によれば、しばられているのはロシア軍のスパイを働いたやつで、見せしめのために日本軍の手で首を斬られようとしているところであり、取りかこんでいるのは、その見せしめのお祭りさわざを見物に来た連中とのことであつた。

この学年がおわらぬうちに、私は東京へ出てしまつた。あのことがあつて以来、私は、医学など少しも大切なことでない、と考えるようになった。愚弱な国民は、たとい体格がどんなに健全で、どんなに長生きしようとも、せいぜい無意味な見せしめの材料と、その見物人になるだけではないか。病氣したり死んだりする人間がたとい多かろうと、そんなことは不幸とまではいえぬのだ。されば、われわれの最初になすべき任務は、彼らの精神を改造するにある。そして、精神の改造に役立つものといえば、当時の私の考えでは、むろん文芸が第一だつた。そこで文芸運動を提唱する氣になつた。東京にいる留学生仲間では、法政や、理化や、さらに警察や、工業を学ぶ連中は多かつたが、文学や美術を修めるものはいなかつた。それでもどうやら、冷淡な空気のなかで、数人の同志を見つけたことはできた。そのほかになお、必要な数人

をかり集めて、相談した結果が、ともかく雑誌を出そうということになつた。雑誌の題名は「新しい生命」という意味を取ることにになり、私たちはそのころ、多く復古的な傾向があつたところから、これをつめて単に「新生」と称することにした。

『新生』の出版の期日がせまつた。が、まず最初に、原稿を引き受けていた数人が姿をくらました。つづいて、さらに資本が逃げてしまつた。あとには一文なしの三人だけが残された。始めるときから時勢にそぐぬ計画だったので、失敗したとて今さら何もうべきことはない。しかもその後は、この三人さえ、それぞれの運命に駆り立てられて、いっしょに集まつて未来のよき夢を語りあうこともできなくなつた。これが、われわれの生まれざりし『新生』の顛末である。私が、これまで経験したことのない味気なきさを感じるようになったのは、それ以後のことである。はじめ私は、なぜそうであるかがわからなかつた。のちになつて考えたことは、すべて人の主張は、賛成されれば前進をうながすし、反対されれば奮闘をうながすのである。ところが、見知らぬ人びとのあいだで叫んで相手にいふような反応がない場合、賛成でもなければ反対でもない場合、あたかも漣なみしれぬ荒野に身をおいたように、手をどうしていいかわからぬのである。これはなんと悲しいことであらう。そこでは私は、自分の感じたものを寂寞さびと名づけた。この寂寞は、さらに一日一日成長していつて、

大きな毒蛇のように、私の魂にまつわつて離れなかつた。

しかし私は、自分に理由のわからぬ悲しみをいだいていたとはいへ、憤る気持はいささかもなかつた。なぜなら、この経験が私を反省させ、自分を見つめさせたからである。つまり私が、臂を振つて一呼すれば応ずるもの雲のごとしといった英雄ではないということである。

ただ自分自身の寂寞だけは、除かないわけにいかなくなつた。それは私にとつてあまりにも苦痛であつたから。そこで私は、種々の方法によつて、自分の魂を麻醉させ、自分を国民の中沈め、自分を古代に返らせようとした。その後、もつと大きな寂寞、もつと大きな悲しみを、いくつも直接体験したり、かたわらから眺めたりした。すべて私にとつて、思い出すに堪えない、それらを私の脳といっしょに泥土の中に沈めてしまいたいことばかりである。が、私の麻醉法はききめがあつたらしく、青年時代の慷慨きやうがいの氣持はもう起らなくなつた。

S 会館(会館は同郷人の聚)には広さ三間の小さな部屋があつた。むかし、庭の槐の木で女が首をつつたと言ひ伝えられていた。いまでは槐の木は、もう登れぬくらい高くなつてゐるが、その部屋にはまだ住み手はなかつた。何年も何年も、私はその部屋をねぐらにして、古い碑文を写していた。仮りのすみ家に訪れる客はなし、古碑の中では問題にも主義にもぶつからずすんだ。し

かも私の生命は、このまま暗々のうちに消えてゆくのである。これぞ私の唯一の願ひでもあった。夏の夜は、蚊が多い。棕櫚のウチワを使いながら、槐の木の下に坐つて、生い茂った葉のすきま越しにチラチラ見える青空を眺めていると、おそ出の青虫がよく冷やりと首筋に落ちてくることがあった。

そのころ、ときたま話しにやってくるのは、古い友人の金心異であった。手にさげている大型のカバンをぼろ机の上にほうりだし、長衣を脱いで、向かいあつて坐る。犬ざらいだから、まだ心臓をドキドキさせているらしい。

「君はこんなものを写して、なんの役に立つのかね？」ある夜、彼は私のやっている古碑の写本をめくりながら、研究めいた質問を出してき

た。

「なんの役にも立たんさ」

「じゃ、君はなんのつもりで写すんだ？」

「なんのつもりもない」

「どうだい、君はなにか文章でも書いて……」私には、彼の言う意味がわかった。彼らは『新青年』という雑誌を出している。ところが、そのころはまだだれも賛成してくれないし、と

いつて反対するものもないようであった。彼らは寂寞におちいったのではないか、と私は思った。だが、言つてやつた。

「かりにだね、鉄の部屋があるとするよ。窓は一つもないし、こわすことも絶対にできんだ。まなには熟睡している人間がおおせにいる。ま

もなく窒息して、みんな死んでしまふだろう。だが、昏睡状態からそのまま死へ移行するのだから、死ぬ前の悲しみは感じないんだ。いま君が、大声を出して、やや意識のはつきりしている数人のものを起したとすると、この不幸な少数のものに、どうせ助かりつこない臨終の苦しみを与えることになるが、それでも君は彼らに済まぬと思わぬかね」

「しかし、数人が起きたとすれば、その鉄の部屋をこわす希望が、絶対にないと言えんじやないか」

そうだ。私はひろん、私なりの確信はもっているが、しかし希望ということになれば、これは抹殺はできない。なぜなら、希望は将来にあるものであるから、絶対はないという私の証明をもつてして、ありうるという彼の説を論破することは不可能だからだ。そこでけっきょく、私は文章を書くことを承諾した。これがすなわち、最初の「狂人日記」という一編である。その後は、踏み出した以上はもどるわけにいかず、友人たちの依頼があるたびに小説めいた文章を書いて、お茶をにごしてきたのが、積り積り十数編になった。

思うに私自身は、今ではもう、せつなさが突きあげてきて声になるといった人間ではなくなっている。だが、あのころの自分の寂寞の悲しみが忘れられないせいでもあろうか、ときとして思わず吶喊が口から出ることがあるが、せめてそれによって、寂寞のただ中を突進する猛士

に、彼が安んじて先頭をかけられるよう、慰めのいくぶんでも与えられたらと思う。私の吶喊の声が、勇ましいか悲しいか、憎々しいかおかしいか、そんなことは顧みるいとまはないのだ。ただ、吶喊であるからは、主将の命令はきかないわけにいかなかった。そこで私は、往々にしてかつてな曲筆を弄し、「葉」の瑜児の墓には、いわれのない花輪を添えたし、「明日」でも、単四瘦子がついに息子に会う夢を見なかった、とは書かなかつたのである。これは当時の主将が、消極をきらつたためであるが、また私自身としても、それで自分が苦しんできた寂寞を、私の若いころとおなじように甘い夢を見ている青年に伝染させたくなかつたのである。

こうしてみると、私の小説が芸術からはるかに遠いことは、申すまでもないことである。しかるに今日、いぜんとして小説の称を受けているばかりでなく、一本にまともなる機会さえ与えられるに至つては、なにはともあれまことに僥倖といわざるをえない。僥倖の点では、私は心もとなさを感じはするが、またひるがえつて、しばらくなりとこの世に読者がつくことを思えば、さすがにうれしくないことはない。

されば私は、ここに自分の短編小説を集めて印刷に付し、ついでには以上に述べた因縁によって、これを『吶喊』と名づけたのである。

一九二三年十二月三日、北京において

魯迅しるす

狂人日記

二日しるす。

今夜は、月がいい。

某といえるもの兄弟、いまその名を秘すも、みな余が往時、中学校にありし時代の良友なり。隔て住むこと多年、音信ようやく稀なりし。さきごろ、たまたまその一人の大病せし由をきく。あたかも故郷に帰るに際し、道を迂回して訪れるに、一人にのみ会えりしが、病みしは弟なりという。遠路の見舞いかたじけなし、されど当人は病すでにいえて、某地に候補となりて赴任せり、かく言いもて大いに笑い、日記帳二冊を取り出して余に示して曰く、これを見たまえ、

当時の病状を知りたまわん、旧友に献ずるはさしつかえなし、と。持ち帰りて一読するに、けだしその病の「被害妄想狂」の類なりしことを知る。語るところきわめて錯雑し、順序次第なく、荒唐の言また多し。月日は記さざれど、墨色と字体の一樣ならざるにより、その一時に成りしにあらざるや必せり。あいだにやや脈絡をそなうる箇所あり、いまこれを抜粋して一編となし、医家の研究材料に供せんとす。日記中の語の誤りあれど、一字も訂正せず。ただ人名のみは、すべて村人にして世の有名なならず、はばかるところなしといえども、これを改めたり。さらに書名は、もと本人の全快後に題せしものなれば、あえて改むることなし。民国七年四月

おれはあれを見なくなつてから、三十年以上たつ。今日は見たから、気分がじつにいい。してみると、これまでの三十年以上は、まったく正気でなかつたわけだ。だがじゅうぶん用心しなきゃならん。でないと、あの趙家の犬がなぜおれをじろじろ見るのか。

二

今日はまるきり月がない。おれはまずいと思つた。朝、用心して家を出ると、趙貴翁の眼つきがおかしい。おれをこわがっているようでもあるし、おれを無きものにしようと思つているようでもある。ほかにも七、八人、ひそひそ耳打ちして、おれの悪口をいっているやつがある。そのくせ、おれに見られるのがこわいのだ。往來であつたやつが、みんなさうだ。なかでもいちばん人相の悪いのが、大口をあけて、おれを見て笑ひやがつた。おれは頭のとっぺんから脚の先まで、ゾツとなつた。やつら、すっかり手はずをととのえたな、と思つた。

しかし、おれはこわくなかつた。平気で歩いていった。向こうのほうに子どもがかたまつていて、これもおれの悪口をいっていた。眼つきは趙貴翁とおなじだし、顔色もどす黒い。おれ

は、子どもたちが何のうらみがあつて、子どもたちまでこんなマネをするのかと思つたら、がまんできなくなつて「言つてみる！」ってどなつてやつた。そしたら逃げて行つてしまつた。

おれは考えた。趙貴翁はおれに何のうらみがあるのか。通行人はおれに何のうらみがあるのか。あるといえれば二十年前に、古久先生の古い大福帳を踏んづけて、古久先生にいやな顔をされたことがあるだけじゃないか。趙貴翁は古久先生の友人ではないが、きっとその噂をきいて、おれのことを憤慨しているんだろう。そして通行人をそそのかして、おれを憎むように仕向けているんだろう。ところで、子どもはどうだ。

あのころは生まれてもないじゃないか。そのくせ、なぜ今日は、おれをこわがっているような、おれを無きものにしようと思つるような、へんな眼つきでおれをにらむんだ。こればかりは、おそろしいことだ。不思議なことだし、悲しいことだ。

そうだ、わかつた。おやじや、おふくろたちが教えたんだ。

三

夜、どうしても睡れない。ものごとはすべて、研究してみないとわからんものだ。

やつら——その中には、県知事に枷をはめられたやつもいる。ボスにひっぱたかれたやつもいる。役人に細君を寝取られたやつもいる。おやじやおふくろを借金取りにいじめ殺されたや

つもいる。しかし、そのときのやつらの顔つきだって、昨日のようにおそろしくはなかったし、ものすごくはなかつた。

なかでも不思議なのは、昨日往来であつたあの女だ。自分の息子をなぐりながら「畜生、おやじめ！ あたしや、おまえさんに食らいついでやらなきや腹の虫がおさまらない」と言っているのだ。そのくせ、眼はおれのほうを向いている。おれはドキッとなつて、うろたえてしまつた。そうすると、あの青い顔の、歯をむき出したやつらどもが、ドッと笑うのだ。陳老五がいそいでやつてきて、むりやりおれを引きずつて家へ連れて帰つたつて。

引きずつて家へ帰つた。家のものはみな、よそよそしいふうをしてやがる。やつらの眼つきは、ほかの連中とおなじなんだ。書齋へはいつたら、外から鍵をかけやがつた。まるで鶏かあひるでも追い込んだみたいさ。この一件で、おれはますますやつらのカラクリがわからなくなつた。

二、三日前、狼子村から小作人が来て、不作をこぼして、兄貴に話していったつて。やつらの村に大悪人がいて、みんなに殴り殺されたが、そいつの内臓をえぐり出して、油でいためて食つたやつがあるそうで、そうすると肝っ玉が太くなるという話だ。おれがちよつとわかから口をいれたら、小作人と兄貴とが、じろじろおれのほうを見たつて。今日やつとわかつた。やつらの眼つきは、町にいた連中の眼つきにそく

りそのままじゃないか。

思い出しただけで、おれは頭のとっぺんから脚の先まで、ゾツとなる。

やつらは人間を食いやがる。してみると、おれを食わないという道理はない。

そうだと、あの女が「おまえさんに食らいついでやる」と言つたのと、あの顔の青い、歯をむき出した連中が笑つたのと、こないだあの小作人がしゃべつたことは、とつきり暗号なのだ。そらだ、わかつた。やつらの言うことはみんな毒だ。笑いの中には刀がある。やつらの歯はみんな白くてピカピカだ。あれは人間を食う道具なのだ。

おれは自分では、悪人でないつもりだったが、古の家の大福帳を踏んつけて以来、少しあやしくなつた。やつらは何か考えているらしいが、おれには見当がつかぬ。まして、やつらは仲たがいすると、すぐ人を悪人よばわりするのだ。おれは今でもまだおぼえている。兄貴がおれに論文の書き方を習わせたとき、どんな善人でも少しけなしてやると、マルをたくさんくれたつて。悪人を弁護してやると「奇想天外」だとか「独創的」だといつてはめてくれたつて。やつらが何を考えているのか、おれに見当のつくはずはない。まして、食おうと思つている際なんだから。

ものごとはすべて、研究してみないことにはわからない。むかしから絶えず、人間を食つたとおれは覚えているが、あまりはつきりしない。

おれは歴史をひっくり返してしらべてみた。この歴史には年代がなくて、どのページにも「仁義道徳」などの字がぐねぐね書いてある。おれは、どうせ睡れないから、夜半までかかつてたんねんにしらべた。そうすると字と字のあいだからやつと字が出てきた。本には一面に「食人」の二字が書いてあつた。

本にはこんなにたくさん書いてある。小作人はあんなにたくさんしゃべつた。そのくせ、ニヤニヤ笑いながら、へんな眼でおれをにらみつけやがる。

おれだつて人間だ。やつらは、おれが食いたくなつたんだ。

四

朝、しばらく静座した。陳老五が飯を運んできた。野菜が一皿、魚の蒸したのが一皿。その魚の眼は、白くてコチコチで、パツクリ口をあけているところは、あの人間を食いたがつている人間どもとおなじだ。少し箸をつけてみたが、ヌルヌルしていて、魚だか人間だかわかりやしない。腹の中のものを洗いざらい吐き出してしまった。

「老五、兄貴に言つてくれ、おれは退屈でたまらんから、庭を散歩したい」と言うると、老五のやつ、返事もしないで行つてしまつた。だがまもなくやつて来て、戸をあけてくれた。

おれは動かなかつた。やつらがおれをどう処置するか、見ていてやろうと思つた。どうせ、

おれを釈放する気のないことはわかっている。やっぱりそのとおりだった。兄貴が一人の老人を案内して、のろのろはいつて来た。不気味な眼つきをしたやつだ。その眼つきをおれに気取られまいとして、下ばかり向いてやがる。そして眼鏡のふちから、チラチラおれの様子をうかがう。兄貴が「今日はだいたい工合がいいようだね」というから「ええ」と答えた。兄貴が「今日は何先生に診察してもらうことにしたよ」というから「そうですね」といつてやつたが、この老人が首斬り人の化けたのだからいはい百も承知のうえだ。脈を見るという口実で肉づきの加減を見るにきまつている。その功によつて自分も肉のひと切れも分けてもらうつもりだろう。おれは、こわくなんか無い。人間こそ食わないが、肝はやつらより太いんだ。拳骨を二つ突き出して、やつが何をするか見ていた。やつは腰かけて、眼をつむつて、長いことモソモソやつて、長いことポカンとしていた。それから例の不気味な眼をあけて「くよくよせんぞな。静かに養生すればよくくなります」と言つた。

「くよくよせんぞな、静かに養生しろ！ 養生して肥えれば、むろん、やつらはそれだけよけい食えるわけだ。だが、おれに何のよいことがあるか。何が「よくくなります」だ。やつら一味は人間を食いたがつていにくせに、変にビクビクして、体裁ばかり気にして、思い切つて手をくだすことができないのは、笑止千万な話だ。おれはこらえきれなくなつて、大声で笑つてやつたら、すつかりいい気持になつた。この笑いは勇氣と正氣がみちあふれているのが、自分でもわかつた。老人と兄貴とは、顔色を変えて、おれの勇氣と正氣とに圧倒されてしまつた。だが、おれに勇氣があればこそ、やつらはいつそうおれを食いたがる。その勇氣にあやかりたいのだ。老人は部屋を出ていつてまもなく、小声で兄貴にさざやいた。「さつさと食うんぞな」。兄貴はうなずいた。そうか、兄貴もか、とおれは思った。この大発見は、意外のようであつて、じつは意外ではなかつた。グルになつておれを食おうとする人間が、おれの兄貴なのだ。

人間を食うのがおれの兄貴だ。おれは人間を食う人間の弟だ。おれ自身が食われてしまつても、いぜんとしつておれは人間を食う人間の弟だ。

五

この二、三日は、一步退いて考えてみた。かりにあの老人が、首斬り人の化けたのではなくて、正銘の医者だとしても、人間を食う人間であることに変わりはない。やつらの祖師の李時珍のつくつた『本草なんとか』という本には、人肉は煮て食えるとかハッキリ書いてあるじゃないか。これでもやつは、私は人間を食ひませんと云へるか。

「子を易えて食う」ことはありうることで自分の口から言つたはずだ。それからまた、何だつたかで、ある悪人を論じたとき、そいつは殺すばかりでなく「肉を食らい、皮に寝ね」てしかるべきだと言つたことがある。そのころ、おれはまだ小さかつたので、心臓がいつまでもドキドキしていた。こないだだつて、狼子村の小作人が来て、肝を食つた話をしたとき、兄貴は眉ひとつ動かさず、しきりにうなずいていた。これで見つて、昔とおなじように心が残忍なことがわかる。「子を易えて食う」ことがありうるとしたら、何だつて易えられるはずだ。だれだつて食えるはずだ。おれはむかしは、兄貴のお説教をただほんやり聞き流していただけだつたが、今にして思うと、やつがお説教するときには、きつと口のはたに人間の油をなすりつけていたばかりでなく、心には人間を食ひたい欲望がいつぱいいつぱつていたにちがいない。

六

まっ暗だ。昼間だか夜だかわからない。趙家の犬がまたほえ出した。

七

おれはわかつた。やつらの手口はこうだ。バツサリやつてしまうのは、やりたくないし、またやれないのだ。タタリがこわいからだ。そこでみんなで連絡をとつて、網をはりめぐらせて

おいて、否でも応でもおれに自殺させるように仕向けているのだ。そうだ。こないだ町で見た男や女の様子からしたって、このごろの兄貴の挙動からしたって、八九分どおりそれにまちがいない。おれが自分で腰帯をとりて、梁にかけ、自分でぶら下がって死んでしまえというんだらう。やつらは殺人の罪名を着ないで、しかも念願がかなうという寸法だ。飛び上がって喜んで、ウーウー悲鳴をあげて笑うだろうな。そうでないとしたら、もだえ苦しんで、もだえ死んでしまふかだ。これだと肉はおちるが、まあまあ満足というところだらう。

やつらは、死肉しか食えないのだ——そうだ、何かの本でよんだことがある。「ハイエナ」とかいふ動物がいるそうだ。眼つきも、からだつきも、醜悪な動物だ。いつも死肉を食っていて、どんな太い骨でも、バリバリ噛んでのみこんでしまふそうだ。考えただけでもおそろしい。

「ハイエナ」は狼の親類で、狼は犬の本家だ。こないだ趙家の犬が、じろじろおれを見ていたのは、やつも一味で、連絡がついていたとみえる。老人は眼を伏せて、下ばかり向いていたが、そんなことでおれがだませるものか。

いちばん気の毒なのは、兄貴さ。やつだつて人間だ。どうしてこわがらないのだ。おまけにグルになっておれを食うなんて。慣れっこになつてしまつて、悪いと思わないのだらうか。それとも良心を失つてしまつて、知りつつやるのだらうか。

おれは、人間を食う人間を呪うのに、まず兄貴から呪いはじめよう。人間を食う人間を改心させるのに、まず兄貴から改心させよう。

八

しかし、こんな理屈は、もう今では、やつらにわかつていていいはずなんだが……

とつぜん、一人の男がやって来た。年はせいぜい二十歳前後、顔かたちははっきりしない。ニコニコしながら、おれに向かつて会釈した。だがその笑いも、どうもほんとうの笑いでなかった。おれは尋ねてやった。「人間を食うことは、正しいか？」その男は、相変らずニコニコしながら答えた。「飢饉でもないのに、人間を食つたりするものか」。おれはすぐになさとつた。こいつも一味で、人間を食いたがっているんだ。そこで勇氣百倍、あくまで問いつめてやった。「正しいか？」

「そんなことをきいて、どうするんです。あなたは、まったく……冗談がうまい……今日はいい天気ですね」

いい天気だった。月もあかるい。だが、おれはおまえにきいているのだ。「正しいか？」

彼はそうだとはいわなかった。あいまいな口調で「いや……」と言つた。

「正しくない？　じゃ、やつらはなぜ食うんだ」

「そんなバカな……」

「そんなバカな？　げんに狼子村では食つてい

る。おまけに本にも書いてある。まっ赤な、新鮮な」

彼はさつと顔色を変えた。鉄のような青い色になつた。眼をまんまるくして、「そりや、あるかも知れませんがね、むかしからそうだったの……」

「むかしからそうだったのなら、正しいか？」
「そんな議論、あなたとはしませんよ。とにかく、あなたはやべつてはいけぬ。おつしやることはみな、まちがいです」

おれは飛び起きた。眼をあげてよく見たら、その男の姿はなかつた。全身にグツツヨリ汗をかいていた。あいつは年はおれの兄貴よりずつと下のくせに、もう一味なのだ。きつと、おやじかおふくろが教えこんだにちがいない。もう自分の息子にも教えてしまつたかもしれん。だからこそ、子どもまでがおれを憎々しげに見るのだ。

九

自分では人間を食おうとし、しかし他人からは食われまいとするから、疑心暗鬼で、お互いにジロジロ相手を盗み見あつている……

こんな考えをすてて、安心して仕事をし、往來を歩き、飯を食ひ、睡つたら、どんなに気持ちがいいだらう。それはほんのひとまたぎ、一つの関を越えるだけだ。だが、やつらは親子、兄弟、夫婦、友人、師弟、仇敵、それに見も知らぬ他人同士までいっしょになつて、お互いには

げましあい、お互いに牽制しあつて、死んでもこの一步を踏み越そうとしないのだ。

+

朝はやく、兄貴に会いにいった。兄貴は部屋の外に立つて、空を眺めていた。おれはうしろにまわつて、入口に立ちふさがつて、ごくおだやかに、ごくおとなしく、話しかけた。

「兄さん、お話したいことがあるんですが」

「言つてごらん」と、兄はすぐふりむいて、うなずいてみせた。

「ちよつとしたことなんです。それがうまく言えないんです。兄さん、たぶん大むかしは、人間が野蛮だったころは、だれでも人間を食つたんでしょね。それがのちになると、考えが變つたために、あるものは人間を食わなくなつて、ひたすらよくなるうと努力したために、それで人間になりました。真実の人間になりました。ところが、あるものはやはり人間を食つた——虫だつておなじです。あるものは魚になり、鳥になり、猿になり、とうとう人間になりました。あるものは、よくなるうとしなかつたために、今でもまだ虫のままです。この人間を食う人間は、人間を食わない人間にくらべて、どんなにはずかしいでしょうね。虫が猿にくらべてはずかしいより、もっともつとはずかしいでしょうね。」

「易牙(古代の料理人)が自分の子を蒸して、桀紂(古代の暴君)に食わせた話は、あれはずつと大むかしの

ことなんでしょか。そうじゃないんです。盤(古(伝説の)天子が天地を開いて以来、ずつと食いつづけて易牙の子にいたり、易牙の子からずつと食いつづけて徐錫林(清末の革命家、本名は徐錫麟)にいたり、徐錫林からずつと食いつづけて狼子村でつかまつた男にいたるのです。去年、城内で囚人が処刑されたときは、肺病やみがその血をパンにつけてなめました。

「やつらはほくを食うんです。そりや、兄さんひとりじゃなんともならないでしょう。しかしだからといつて仲間にはいることは、ないじゃありませんか。人間を食う人間は、どんなことだつてやりますよ。ほくを食うからには、兄さんだつて食いますよ。仲間同士で食ひあいますよ。ただ、一步だけ向きを変えれば、今すぐ改心さえすれば、みんな太平になるんです。昔からそうだったかもしませんが、ほくたち今日からでも、一生懸命に心を入れかえて、いけないうつて言えはいいんですよ。兄さん、あなたは言えるとおぼくは思います。だつて、このあいだ小作人が年貢をへらしてくれと言つたとき、兄さんは、いけない、つて言つたじゃありませんか」

はじめのうち、兄は冷笑をうかべているだけだつたが、やがて眼つきがけわしくなつてきて、やつらの内幕をすば抜いてやつたとたんに、顔がまっさおになつた。表門の外におおせい人が立っていた。趙貴翁も、その犬もまじつていた。その連中が、おそるおそる門の中へはいっ

て来た。あるものは顔がわからぬ。きれをかぶつてゐるらしい。あるものは例の青い顔の、歯をむき出したやつで、ニヤニヤしてやがる。見覚えのある一味のやつらだ。どれも人間を食う人間どもだ。ただし、やつらのあいだに考え方の食いちがいがあつてもわかっている。昔からそうだったから、食うのがあたりまえだと思つてゐるやつと、食つてはいけなうと知りつ

つ食ひたがっているやつとだ。おまけに、すつば抜かれるのが困るものだから、おれの言うことをきいてカンカンに腹を立てているくせに、ニヤニヤせら笑つていやがるのだ。そのとき、兄貴が急にこわい顔をして、大声でどなった。

「出て行け！ 氣ちがいは見せ物じゃない！」

そのとき、おれはまた、やつらの妙計に氣がついた。やつらは、改心するどころか、とつくとワナをこしらへてゐるのだ。氣ちがいという看板を用意しておいて、おれにおつかふせやがつたんだ。こうすれば将来、食つた場合に太平無事であるばかりでなく、なかには同情してくれるものもあるうというものだ。小作人の話にあつた、みんなで一人の悪人食つたというの、つつきりこのやり口だ。これがやつらの常套手段だ。

陳老五も、プリプリしてやつて来た。だが、おれの口がふさげるものか。おれはあくまで、この連中に言つてやつた。「おまえたち、改心するがいい。しん底から改

心するんだ。いいか、いまに人間を食う人間は、この世にいられなくなるんだぞ。生きていかれなくなるんだぞ」

「おまえたち、もし改心しないと、自分も食われてしまふぞ。いくらたくさん生んだって、みんな真実の人間にほろぼされてしまふぞ。獵師が狼を狩りつくすとおなじように——虫けらとおなじように」

そのおおぜいのやつらは、みんな陳老五に追っ払われてしまった。兄貴もどこかへ行ってしまった。陳老五がおれをなだめて、部屋へつれて帰らせた。部屋のなかはまっくらだった。梁や垂木が、頭の上でふるえだした。ブラブラふるえていたと思うと、急にでかくなって、おれの上へのしかかってきた。

重い。じつに重い。身動きもできない。やつは、おれを殺そうというのか。だがおれは、やつの重さがマヤカシだと気がついたから、身もがいて抜け出したが、汗びっしょりかいた。それでもおれは言つてやった。

「おまえたち、いまずぐ改心しろ。しん底から改心しろ。いいか、いまに人間を食う人間は、この世にいられなくなるんだぞ……」

十二

太陽も出ない。戸も開かない。毎日二度の飯。

おれは箸を取りあげると、兄貴のことを思い出した。妹が死んだわけも、やつにあることに気がついた。あのとき、おれの妹は五つになつ

たばかりだった。かわい、いじらしい様子が、いまでも眼にかぶ。おふくろは泣きどおした。兄貴はおふくろに、あまり泣くなと言つた。自分が食つたものだから、泣かれるといくらか気がとがめるのだらう。もしまだ気がとがめるなら……

妹は兄貴に食われた。おふくろは知っていたらうか。おれにはわからぬ。

おふくろも、たぶん知つていたらう。だが、泣いたときは何も言わなかった。たぶん、あたりまえのことだと思つていたんだらう。たしかおれが四、五歳だつたと思うが、部屋の外で涼んでいるとき、兄貴がこんなことを言つた。父母が病氣になつたら、子たるものは自分の肉を一片切り取つて、よく煮て父母に食わせるのが立派な人間だ、と。そのときおふくろも、それがいけないとは言わなかった。一片が食えるなら、むろん、丸ごとだつて食えるわけさ。だが、あのときの泣きようは、いま思い出しても胸がいたむ。じつに不思議なことだ。

十三

考えられなくなった。

四千年來、たえず人間を食つてきたところ、そこにおれも、なが年くらしてきたんだということが、今日やつとわかった。兄貴が家を管理しているときに妹は死んだ。やつがこつそり料理にまけて、おれたちにも食わせなかったといえない。

おれは知らぬ間に、妹の肉を食わせられなかったとはいえない。いま番がおれにまわつてきて……

四千年の食人の歴史をもつおれ。はじめはわからなかったが、いまわかった。真実の人間のえがたさ。

十三

人間を食つたことのない子どもは、まだいるかしらん。

子どもを救え……

(一九一八年四月)

孔乙己

魯鎮の居酒屋の構造は、ほかの土地と異なっていた。往來に面して、曲尺形の大きなスタンドがあり、スタンドの内がわには湯が準備してあって、いつでも燗がでるようになっていた。職人たちが、昼時分や、夕方時分に、仕事をすませたあとで、銅貨四文払って、一杯の酒を買

ては一杯が十文はするだろう——立ったままスタンドにもたれて、熱いところをひっかけ、ひと息いれる。もう一文奮発すれば、塩筍か茴香豆が一皿出て、肴になる。もし十数文払えば、肉料理が一品買える。しかし、ここへ来る客種は、紳士階級が多いから、普通はそんなぜいたくなまねはしない。長衣を着たものだけが、店さきを抜けて奥の部屋へ通り、酒と料理をあつらえて、腰をおちつけてちびりちびりやるのである。

私は十二歳のときから、鎮のはずれにある咸亨酒店に小僧にはいった。主人は、おまえは見るとまると、表のほうを手つたうように、と

自分で確かめないことには承知しなかった。燗壺の底に水があるかないか検分して、それから燗をつける湯に入れるまでを見とどけて、やっと安心する始末である。こんな厳重な監督をされていたのでは、水を割るのもなみたいていではない。そこで、四、五日すると、主人はまたも、私に腕がないと言ひ出した。さいわい、世話人の顔がよかったので、くびにするわけにもゆかず、おなげで燗番専門という張りあいのない仕事のほうへまわされた。

それからというものは、私は、一日じゅうスタンドの内がわにいて、自分の仕事に精を出した。たいした失敗もなかったかわりに、しごく退屈で、ものたりなかった。主人は鬼つづらだし、客も気むつかしいとききているので、元氣になりようがなかった。ただ、孔乙己が来たときだけは、笑い声が出た。それで、今でもおぼえている。

孔乙己は、立ち飲み仲間長衣を着ているただひとりであった。背がおそろしく高く、青白い顔色をして、皺のあいたによく生傷のあとがあった。ごま塩のあごひげをぼうぼうに生やしていた。着ているのは長衣にはちがひなかつたが、汚れてポロポロになっていて、まるで十年以上もつくりたり洗ったりしたことがないふうだった。人と話をするとき、二言目には「なりけりあらんや」なので、相手はチンブンカンブンである。彼は、姓が孔であるところから、他人が、手習草紙の「上大人孔乙己」とい

う訳のわかるようなわからぬような文句から取って、彼に孔乙己というあだ名をつけてやっただけである。孔乙己が店へ顔を出すと、一杯やっていた連中が、みんな彼をからかう。ひとり「孔乙己、おまえの顔に、また新しい傷がふえたな」と呼びかける。孔乙己は、相手にならないで、帳場のほうへ「二本つけてくれ、それから豆を一皿」そして銅貨を九文並べる。連中はまた、わざと大きな声で「おまえ、きつとまた、人のものを盗んだな」とどなる。孔乙己は、目をむいて「なんで、そんな、ありもしないことを言つて、濡れ衣を着せ……」「濡れ衣がきいてあきれらあ。おらあ、おととい、この目で見ただぞ。おまえが、何家の本を盗んでさ、吊されて、打たれるところをな」と孔乙己は、顔をまっ赤にして、額の青筋を一本一本立てて、抗弁する。「竊書は盗みとは申せん……竊書はな……読書人の常じゃ。盗みと申せるか」それから、むつかしい話になって「君子固より窮す」(論語)だとか、なんとか「あらんや」となる。そこで、一同はどつと笑いこけて、店の内外に快活な空気があふれる。

人が陰で噂しているのをきくと、孔乙己は、もとは学問をした人間なのである。ところが、なんとしても秀才の試験(官吏になる国家試験)に受からなかつたし、暮らしを立てることもできなかつた。そこで、だんだん貧乏になって、乞食をせんばかりにおちぶれてしまった。さいわい手がよく書けたので、人の依頼で書物を筆写して、